

海外報告

自転車とカレーライスの日々 ——スウェーデンでの研究、生活、そして社会——

鈴木 啓太

北海道大学農学部附属農場

はじめに

1998年3月から11月の間、北欧のスウェーデン(王国)(漢字では瑞典と書くそうである)で在外研究を行った。出発時点での当初予定は6ヶ月間であったところを、3ヶ月間延長し、結局9ヶ月間の滞在となった。関係する方々には、不在中の業務について多大なるご迷惑をお懸けし、この場をお借りしてお詫びを申し上げますとともに、せめてもの罪滅ぼしに、本報告を書きたいと思う。すでに彼の国から戻り、早や1年が経過してしまっただけでなく、日本での日々が過ぎていくにつれて、当時の記憶が少しずつ薄れつつあり、自分としても記憶が無くなる前にこのような機会を頂いたことに感謝したい。また、できれば研究に限らず、おそらく他の人々があまり触れないであろう具体的な点についても述べ、特に、始めて長期に海外で滞在する方々の参考になれば、と思う。無論、ストックホルムのxxは面白かった、○○には日本にはないこんなものがあった、云々、を紹介できればよいのだろうが、現実にはほとんどが研究室とアパートの往復の日々だったので、大して面白いお話を紹介することはできない。しかし、その辺は、各種観光ガイド等を参照していただくとして話を進めたい。さらに、ここで述べることは、全くの私の個人的な意見、感想および印象であり、また、私の置かれていた状況ではたまたまそうだったかもしれない。また、事実とは少々食い違っている点もあろうかと思うが、その点はどうかお許し頂きたい。

きっかけから出発まで

本当に偶然なきっかけであった。以前、農林水産省東北農業試験場に研究出張で滞在する機会があり、その際にお世話になっていた永井博士から、「こんな話があるんやが」と、切り出されたのがきっかけである。先方がブタの体外受精のできる人間を求めているとのこと。さらに幸いなことに、資金的なこと(滞在費、旅費等)も先方で面倒を見てくれるということだった。永井博士は非常に広い人脈をお持ちであり、海外にもお知り合いが非常に多いのである。そのような方と知り合いであったことが一つの偶然であり、また、そこ

から話を頂いたことも、もう一つの偶然である。このことから、本人の才能とは全く関係がなく、話が進んでいったと断言することができる。

恥ずかしながら、私は、地理、歴史といったものが不得手であり、正直いってスウェーデンはどこにあるのか(北欧の国程度の知識しか持ち合わせていなかった)、どんな所なのか、ほとんど知識がなかった。強いて挙げるならば、北欧美人のいる国、性教育の進んだ国、福祉の国、税金の高い国、ボルボやサーブといった自動車メーカーのある国、といった程度だった。歴史に至っては、ヴァイキングが近隣の海を荒し回った程度のことしか知らなかった。そこで、まず、地図帳を開くところから準備は始まった。なるほど、北欧諸国の中央に位置しているのだな、ノルウェーのフィヨルドというのは、確か中学の社会科で習ったことがあるぞ、確かにノルウェーは海に面して、西からノルウェー、スウェーデン、フィンランドとなっている。さらに、スウェーデン語を少しは読めるように、話せるようにと、まず、大学の生協に行き辞書を探した。当然のごとく生協には置いておらず、注文しようとしたが、6ヶ月かかると言われたので諦めざるを得なかった(現在、スウェーデン語-日本語辞書はなく、スウェーデン語-英語辞書を手に入れる以外にはない)。比較的マイナーな言語を学ぶためには、辞書すらも入手が困難なのだなぁと、意外に思った。仕方がないので、簡単な入門書とテープを購入し、早速勉強を始めた。元来、語学力の無さを自覚している私は、毎日のようにそれらに目を通し、テープで繰り返し聞いたにも関わらず、上達の兆しはほとんど感じられなかった。それと並行して、日に日にスウェーデンはどんな国なのかについて興味を持ち始め、幾つかの本を読み、スウェーデンに関するある程度の基礎知識を得ることができた。

また、学生であれば当然関係はないのだろうが、職を持っていると、どうしても不在にする間の業務をどうするか、という大きな問題が出てくる。特に私は、大学農場という現場を抱えた所にいるため、その苦悩は大きかった。その辺りをどうにかこうにか(強引に)クリアした、までは良かったが、今度は滞在ビザの取得で大使館とのやり取りに不備があり、結局1週間

ほど当初予定より出発が遅れてしまった。さらに、可能な限り減らした積もりだったが、膨大な荷物を前にして、つくづく自分は旅行慣れしていないなあ、と実感してしまった。今となっては何にそんなに時間がかかったのか、なぜそんなに荷物が必要だったのか不思議なくらいだが、出発直前などは本当に準備が終わるだろうか、と危惧感を持ったものである。結局、ほとんどトランクに入り用のものを「突っ込む」ようにして準備を終え、足りないものがあるのではないかと不安になり、あれもこれも準備しておけばよかったです、などと思いつつ、飛行機に乗り込んでようやくほっとした次第であった。

コペンハーゲン経由でアーランダ(ストックホルム)空港行きの小さな飛行機から見ると、窓の下に荒涼とした原野が広がる。既に夕刻であり、あっという間に闇に包まれる。これから果たして大丈夫だろうか、実験を何とか進めていくことができるだろうか、という不安な思いがふっと頭をよぎる。空港では、これからお世話になる H. Rodriguez-Martinez 教授自身が迎えてくれ、一応スウェーデン語で自己紹介をした(積もりである)。教授の運転する車でウプサラの街へと向かう。気温はかなり低いにも関わらず、積雪はほとんどなく、札幌とは風景が違っていた。これが、寂寥感を起こさせる原因なのだろう。寒々とした街でこれからはしばらく滞在することになるアパートに到着し、ほっと一息つく。生きていく限り、まず食事をしなければならない。近くのスーパーで当面の食料と必要な物を買込み、ハムとパンで、一人寂しく食事をする。この食事と言う点で、後々いろいろな面白い発見があるのだが……。こうして、スウェーデン初日の夜は更けていった。

研究と研究室

私が滞在したのは、スウェーデンの首都、ストックホルムから北に 5,60 km ほどに位置する都市、ウプサラにある(写真 1, 2)、スウェーデン農科(業?)大学(Sveriges Lantbruksuniversitet (SLU), Swedish University of Agricultural Sciences)、獣医学部繁殖



写真 2 Uppsala Slottet (ウプサラスロッセッ
ト：ウプサラ城)

研究室 (Faculty of Veterinary Medicine, Department of Obstetrics and Gynaecology) であった(写真 3)。現在までに、日本人研究者を長期で受け入れるのは始めてだということだった。ウプサラには、他にウプサラ大学という有名な大学があり、街は大学の街という印象を受けた。そのせいもあってか、いろいろな人種の人々がいた。そのため、東アジアの人間がいても、特に違和感はなかった(と思う)。スウェーデン人の学生(大学院生)は、一度職に就いていた人々が大学院に入ることが多く、事実、私などは、それらの学生と比較しても若いほうだった。また、海外からの留学生が多く、研究室では、リトアニア、イタリア、ウルグアイ、タイ、中国、スペイン、ザンビア、カナダ、チリ、等々、主に Ph. D Students として在籍していた。比較的、スペイン語を母国語とする留学生が多かった印象がある。研究室の役割分担がはっきりしている点も興味深かった。たとえば、自動車の整備等を担当している人は、個人的な自転車の修理なども行ってくれ、ネットワークを管理している人は、問題が解決するまでどこまでも対応してくれる。さらに、研究室内の細かな入り用なもの(紙、文具類等)をチェックし、補充してくれる人、そしてやはり重要なのが実験の補助あるいは一部実験を行うテクニシャン。もちろんこれらのことは、学生や先生方の担当ではない。スウェーデンでさえこうなのだから、アメリカなどで



写真 1 Domkyrkan (ドムシュルカン：大聖堂)



写真 3 獣医学部入口。極めて平面的な造り

はもっと専門分化が進んでいるのだろうか、などと思った。このような環境にいる人々と対等に渡り合うことなど可能なのだろうか、と日本の現実を考えて少々悲観的になったりもした。

研究室は、体内 (in vivo) の種々の実験を得意としており、近年ブタの繁殖に関わる研究を精力的に進めている。そこで、今回、ブタ体外 (in vitro) 実験系を新規に開始するにあたり、ブタの体外受精系の導入、改善を私が行うことになったわけである。実際には、研究室から自転車で30分程度のところにある屠畜場へ週3回程度行き、卵巣を回収し、そこから卵子を採取、体外成熟培養させ、体外受精をする、ということが基本となった。ブタの体外受精では、いまだに多精子が卵子に侵入してしまう問題があり、効率的な体外受精卵の作出が難しい (ただし、多前核卵が胚盤胞期まで発生すること、着床すること、などの報告が出てきている。Theriogenology, 49, 284, 1998; Biology of Reproduction, 58, suppl. 1, 394, 1998)。このため、まず、実験系の立ち上げから始まった。話には聞いていたが、細かな方法で、我々の方法と異なる点がいろいろあり、面白い。通常、我々はガラスピペットを火炎上で引き、アンプルカッターで傷を付けてカットし、その後、先端を軽く火炎上であぶることで卵子を取り扱うピペットを作成するのだが、こちらでは、専用のピペットを購入し(かなり高価)、それを洗浄、滅菌して使用していた。また、我々はマウスピースに接続してピペットを使用するが、彼らはスポイトに接続して使用していた。幸い、あらかじめそのようなことは聞いており、アンプルカッターを持参していたので重宝した。テクニシャンの方にピペット作成方法を伝授すべく(我々の方法の方が簡便かつ衛生的だと考えたので)、かなりしつこく教えていたが、結局彼女はなかなか上手く出来ず、あきらめてしまった。というより、わざわざ今のやり方を変える必要はないといった感じだった。そんなこんなで、多精子受精を抑えるべく、日々、屠畜場の往復から始まり、実験室で格闘していたような感じであった。

実験で必要な動物を購入し、実験終了とともに廃棄する、というまあ獣医関係の研究者では当然のことなのだろうが、文部省の会計法に縛られ、そのようなことが難しい(不可能ではないが)国立大学の農場にいる私には非常にうらやましく思ったものだ。動物舎は非常に作りが使いやすくなっており、実験室と動物舎が廊下一本で隔たれているだけで、行き来が非常にしやすい構造になっていた(写真4, 5, 6)。

タイ人留学生との共同実験の一環として、体内から卵管液を採取する必要があり、卵管内にチューブを入れる手術を行い、卵管液を回収することになった。おそらく痛みと痒さのためだろう、チューブに接続した卵管液回収用の試験管を交換しようとする怒り狂



写真4 研究室と動物飼育舎を分けている通路 (右側が動物飼育舎)



写真5 豚舎内部

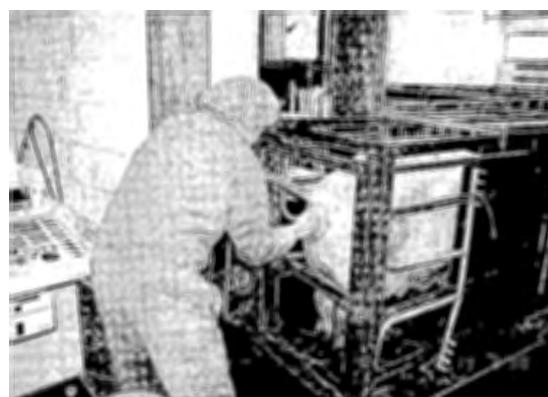


写真6 排卵の有無を超音波で検査しているタイからの留学生。彼とはよく下らない話で盛り上がった

い、こちらに敵意をあらわにしてくる。実験に用いたブタは経産で、比較的大きく、動きまわり、歯向かってくる雌ブタを相手に12時間おきに採取する役割を担うことになった。体外受精実験の合間を縫っての採取はかなりしんどかった。本当にこの教授は人使いが荒いなあ、とその時思った(写真7)。

そのような研究室の生活の中で、いくつか大変なためになったことがあった。精子に関する興味深い研究をされているDr. Suarezが、はるばるアメリカからセミナーのために来国し、それを聞く機会があったことは本当に幸運であり、大変参考になった。セミナー後に



写真7 H. Rodríguez-Martinez 教授が手術のため麻酔をブタに施したところ。この時には、過酷なサンプル採取の役割を仰せ付かるとは夢にも思っていなかった



写真8 アパート外観。一階部分は2店分のスーパーのスペースになっている

彼女と話をする機会を得られたことも非常に貴重な経験だった。その中で、ブタ精子の研究はしないのか、と質問したところ、予算的なこともあり、現在考えていない、ということだった。さらに、それまでの結果をまとめ、イタリア・ベニスで開催された European Embryo Transfer Society (ヨーロッパ受精卵移植学会) で結果を発表する機会 (ポスターだが) を得ることも出来た。

実験の合間に、様々な人といろいろな他愛もない話しをした。特に、タイの人々とはアジア人ということで共通するものがあるのか、色々な話題で盛り上がり、また、彼らには生活面での色々な情報を教えていただき大変感謝している。元来、スウェーデンとタイは歴史的に種々の面で協力関係にあり (例えば、タイ航空のパイロットはスウェーデン人が多かった、等々)、実際タイ人はウブサラにもかなりの数の人々が住んでいるとのこと。時々は彼らとパーティーを行い、タイ料理を食べさせてもらったりもした。それ以外にも、リトアニアからの留学生の話聞いて実感したことの一つに、ソ連の崩壊がある。もちろん情報としては知っていた。しかし、実際に旧ソ連だったリトアニア人から、「以前は、(リトアニア語が彼らの母語であるにも関わらず)ロシア語で学校教育が行われていた」という話を聞くと現実味を帯びて自分に迫ってくる。(ソ連崩壊を) 現実の問題として実感したのは、彼の話聞いてからである。そのような経験をいくつもできたことは非常に貴重なことだと思っている。

カレーライスの日々 (日常生活)

住居は先方で留学生専用のアパートを確保していただき、非常に (日本での住まいよりずっと) 快適な住環境だった (写真8)。海外だからといって、特に変わっているところがあるわけでもなく、文明国であれば、当たり前のことだが、生活する上での問題はほとんどない。必要なものはお金さえ出せば入手することが出来るのだから、せいぜい言葉が通じないことぐらいだ

ろうか (もともと、それが一番の問題であったりするのではあるが)。ただし、日本にあるようなコンビニエンスストアはもちろんない。アパートには皿などは準備されてはいたのだが、いかにせん足りない。研究室の仲間に聞いた安い店を探し、自転車で一時間程のいわゆるホームマックのような安売り店で鍋、包丁、皿等の一式を揃えた。食料品はなるべく変わったものを選んで食べるように心がけた。といってもそれほど変わったものはなかったが、リンゴは日本で売っているものよりひとまわり小さく、皆皮を剥かずにボリボリ食べる。チーズは大きな塊。チーズカッター (正式名称は不明) で削り取って食べる。牛乳は基本的に3種類の脂肪率のものがあり、最高のもので3%だった。ヨーグルトも牛乳と同じ種類のパックに入っていた。ちなみにテトラパックはスウェーデンで発明されたものだそうだ。肉は塊で売っている。細かく切ったものはほとんど置かれていない。魚は色々な種類がある。よく、エビの塩漬けを食べていた。ただ残念だったのは、ザリガニが有名ということで、そのシーズンに生のものを購入、調理して食べようと思っていたが、結局、入手することができず、いまだに悔やまれる。食生活で、特に問題はなかったが、日本では簡単に購入できるマヨネーズがなく、非常に欲しくなった。もちろん、ドレッシング類は豊富にあるのだが、なにせ味が違う。また、街に一件ある中国人が経営している Asian shop に行くと、アジア人向けの食材が購入できる。よく、日本製のカレールーを買いに行ったものだ。味噌こそ購入しなかったが、近くのスーパーでも醤油、のりなど、結構いろいろな日本食が手に入る。普段はあまり時間を取ることができないので、日曜日に一週間分の食事を大鍋いっぱいになり作り (カレー、肉ジャガ、茹で肉のケチャップ酢漬などのパターン)、ライスを鍋で炊く。朝、昼 (弁当)、晩と、ほぼ自炊をしていた。何といても、外食は高く、学食などでも結構高い印象があったためである。昼は弁当 (と言えるほどの代物ではないが) を持参し、研究室の Coffee Room のレンジで加熱して食べる。皆もほとんどが思い思い

の昼食を持参していた。

ほぼ毎日が研究室とアパートの往復(自転車で30分の距離)で時間が過ぎていった。そんなわけで、ほとんどウプサラ以外の街を知らない。唯一、夏休みの間に、ストックホルム、フィンランドに足を伸ばす機会があった程度である。しかしながら、自転車、ジョギング、散歩をするには専用道路が延々と整備されており(写真9)、非常に快適であるため、日曜日には、街の中心から10km程度の場所にあるガムラウプサラという古墳群のあるところなどまで、ジョギング、サイクリングをしていた(写真10)。日本の情報をどのように得ていたかといえば、CNN ニュースはテレビでやっていたが、日本のことは、ほとんど出てこなかった。が、なぜか大相撲放送が流れていた。幸いにも、ノートパソコンを持参していたので、ネットワーク経由で日本のホームページにアクセスすることができ、新聞記事の一部も読むことができた。それらに目を通すことは、毎日の日課であり、その意味では日本との距離を意識することはあまりなかった。世の中便利になったものである。一方で、日本は真に最果ての国で



写真9 自転車、歩行者専用道が延々と続く



写真10 Gamla Uppsala (ガムラ(旧)ウプサラ、日本でいう古墳のようなもの)

あることを実感することもあった。あまり日本の事は知られておらず、特にヨーロッパから来ている留学生はその傾向が顕著で、スペインから来ていた女性はスシすら知らなかった。そんなものかと思った。しかし、過労死のことは知られていた。生活をしていくからには、避けて通ることが出来ないことがいくつもある。床屋に行ったり、スーパーに行ったり、バスに乗ったり、自転車に乗ったり(自転車は右側を通行)、自転車が壊れれば自転車屋に行く必要がある。日本にいるときは意識しないが、外国では、これら一つ一つを行うこと、慣れることに時間がかかる。まあ、それもいいもんだと思ってしまうえば、なかなか楽しいものである。生活をしていく中で、当たり前のことなのだが、外国に行くと、外国人であることを意識せざるを得なかった。

スウェーデンの社会、人々そして生活

200年近く戦争をしていないにも関わらず、大学にもアパートにも、本当に(核)シェルターがあった。原子力発電所に頼らない電力供給方法を探求し、つい先ごろ、一つの原子力発電所のスイッチが切られたとか。それだけでも多くの人々の興味の対象になるのだろうが、さらに高福祉国家、平和国家となればなおさらだろう。街ですれ違う人々は、全く穏やかであり、全く焦らず、全く安心して暮らしている印象を受けた。もちろん、一側面からの見方かもしれないが、本当に満ち足りた生活をしている気がした。スウェーデンに住む人々は、皆、予想していたよりずっと質素である印象を持った。そして、多民族国家である。5年間滞在すると国籍を取得できる。イスラム諸国を含め政治亡命者を多く受け入れている。反面、物価が高い。日本よりも高いのではないだろうか。税金も高く、消費税(付加価値税、Moms)でさえ25%である。また、人口が少なく、首都のストックホルムでさえ、札幌の人口よりも少ない。一方で、国土面積は日本よりやや広く、人口は10分の1である。福祉の国といわれているが、特にそれを実感する機会はとりたててなかった。歩道の段差もしっかりとあった。おそらく、自分が病気等になった場合でなければ、あまり実感できないのかもしれない。彼らは、夏休みを6週間も取り(取らなければいけないと、テクニシャンの方は言っていた)、産休は12ヶ月(取らなければいけない!)、これもさらに延長されそうな気配である。また、(日本の)新聞報道によれば、働く女性ほど、出産する子供の数も多いそうである。つまり、働く女性が育児をする環境が整っていると言えるのかもしれない。また、年を召された方々以外、ほとんどが英語を使用することができる。以前は、英語を話すことができる人は少なかったそうだが、教育によって改善されたと聞いている。スーパーのレジ打ちの人々でも全く問題なく通じるの

だった。これも、母語の関係もあるのだろうが、教育効果という点で日本も参考にすべきではないかと思う。過去には、貧しい農業国家であった国が、先進工業国、高福祉国家へと脱皮したことは非常に興味深く、機会を見つけてそれらについて今後勉強していきたいと考えている。平和で安全かつ穏やかなスウェーデン人の生活が継続されればと願うばかりである。現在、すでに辛くも重税に耐え兼ねた企業の国外流出が危ぶまれているそうである（企業の負担が著しく重い）。

帰国後、何が変わったか？

帰国後、いや、帰国以前から我が日本では色々な社会問題が吹き出てきており、日本は異常なのだろうか、と思ったりもした。スウェーデンの人々は、なんと精神的に豊かな暮らしをしているのだろうか、と日本とのあまりの差に驚くばかりである。うまく言い表すことができないのが残念だが、スウェーデンは日本とは何か違っていた。生きやすい、とでも表現できようか。特に帰国後に感じたことは、「……してはいけない」「……ではだめだ」「……しなくてはならない」云々、の言葉がとても頻繁に飛び交っており、耳につき、つい「なぜ？」と思うことがよくあった（ある）。また、本当に日本は（このような言い方は良くないかも知れない。少なくとも私の周辺、あるいは私の見聞きする各種報道を見る限り）ストレスの蓄積されやすい環境なのだなあ、と実感することがしばしばである。生活すること自体に非常に息苦しさをを感じるようになっていく。既に日本は年間の自殺者が3万人を越え、交通事故死の実に3倍という状態、あるいは過労死の問題、さらには奇怪な事件の多発……日本は大丈夫なのか、と思わずにはいられない。具体的に何とは分からないが、何かが間違っているのではないだろうか？

個人的なことで変化したことはといえば、1) 余計なものはいらない、と考えるようになったこと。帰国後、部屋の中の大物をかなり処分してしまった。これ

は、直接スウェーデンに行ったことと関係があるかどうかは分からないが、何かに固執しなくなったことは確かなようだ。本当に必要なものは何なのだろうか、と今でも考え続けている。さらに2) 経験は重要なことだと考えるようになった。また、3) 日本人である自分が、如何に日本の事を知らないかを思い知らされた。4) (ほとんど頓挫しているが) スウェーデン語をもう少し勉強しようという気持ちを持った。というのも、結局スウェーデン語はちっとも上達しなかったからである。なぜなら、こちらが一生懸命スウェーデン語(と思っていた)で話しかけても理解してもらえず、英語で返されてしまうのだ。大学に関係することと言えば、日本の大学(北大を含め)は、もっともっと他国からの留学生を受け入れ、さらにその敷居を低くすることが必要なのではないか、また、国としても実際に彼らが日本で生活する事が困難なくできるシステムを作って行く必要があるのではないか、と痛切に感じるようになった。

今、思い返してみると、まるで夢のようだった。何だか遠い、遠い昔のことのような気さえしている。日々の生活は単調かつハードであり、それを乗り越えた自信というものは当然ある。一方で、現実の日本の社会に戻ったときのギャップはあまりにも大きかったことも付け加える必要がありそうである。スウェーデン国旗はブルー地に黄色の十字ラインが引かれているものである。夏、散歩をしている時によく見かけた、非常に美しい鮮やかな黄色の花と青い葉との「はっ」とするようなコントラストが強く目に焼き付いている。国旗とその印象が深く心に染みついて離れない。

最後になるが、今回の在外研究は、STINT (The Swedish Foundation for International Cooperation in Research and Higher Education) programmeによるサポートで行われた。また、M. Heriberto-Rodriguez 教授およびSLUのメンバーには本当にお世話になった。この場をお借りして感謝したい。